

住まいと
火災

火災による被害を防ぐための基礎知識

(9) 住宅火災による死者の状況
(その2)

東京理科大学総合研究院火災科学研究所教授

小林 恭一 博士（工学）

前回から、住宅火災による死者の発生状況とその対策などについての解説を始めました。おりしも、令和3年（2021）6月に、消防庁から「高齢者の生活実態に対応した住宅防火対策のあり方に関する検討部会」の報告書（以下「2021報告書」）が発表されましたので、今回からこの報告書のデータも使いながらお話ししていきたいと思います。なお、2021報告書の火災件数と死者数には、原則として、放火による火災件数と放火自殺者数は含まれていません。

男性は女性より火災死リスクが2倍以上高い

2021報告書の「住宅火災による高齢者の死者の実態」の最初に、住宅火災による死者数は男女差が大きいことが取り上げられています。

表1 住宅火災による男女別死者数（2014-2018） n=4628

年齢区分	死者数	男性（割合）	女性（割合）
～64歳	1,385	953	432
65～70歳	628	446	182
71～75歳	525	351	174
76～80歳	616	366	250
81歳～	1,474	718	756
うち高齢者	3,243	1,881	1,362
小計		2,834	1,794
合計		4628	

高齢者の生活実態に対応した住宅防火対策のあり方に関する検討部会報告書（消防庁 2021年6月）

前回、消防白書のデータから、昭和53年（1988）の81歳以上の人口当たり死者発生率は女性で6.20人、男性では11.82人で、男性の方が2倍近く高いなどとしていましたが、最近のデータがなく、男女差について詳しく取り上げることができませんでした。

表1を見ると、住宅火災による死者数は、75歳以下では全年齢層にわたって男性が女

性の2倍以上になっています。81歳以上では女性が男性より多くなっていますが、これは女性の人口が男性の2倍以上になっているためです。

火災死の男女差については世界的に同様の傾向にあるとか、他の不慮の事故でも同様の傾向にあるなどと言われていますが、調べた限りでは明確な理由は見当たりませんでした。私は、女性の方が男性より音や臭いに敏感で、早く火災に気づくことが大きいのではないかと考えています。

住宅火災の出火原因

図1は、2021報告書でまとめられている住宅火災の主な出火原因別件数の推移です。

これを見ると、原因別火災件数の多くが減少傾向を示している中で、電気火災は横ばいから増加傾向にあること、こんろ火災の減少幅が大きいことなどがわかります。

この傾向は、本誌拙稿第1回（2019年9月）で見た住宅以外の火災を含めた火災の傾向と概ね同様です。

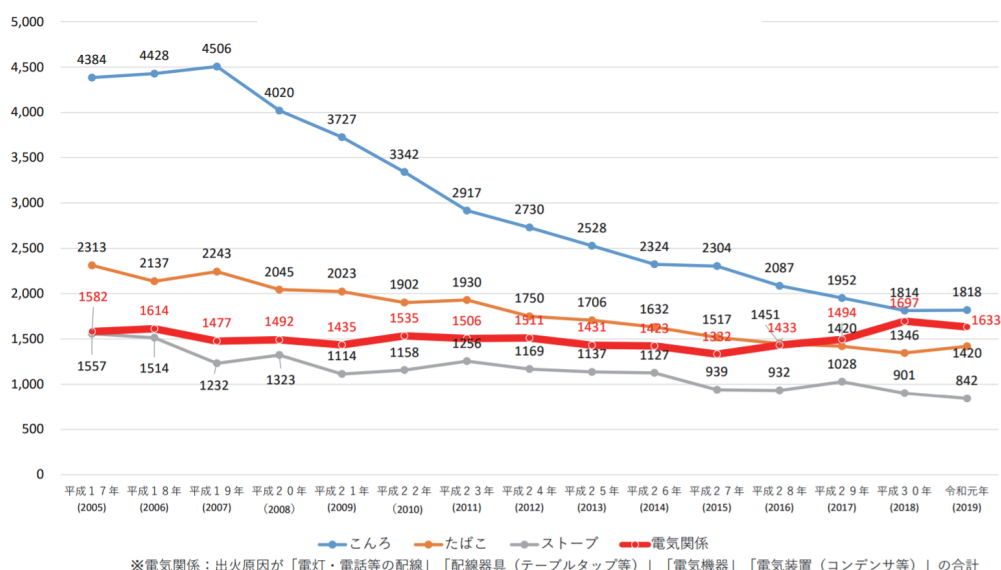


図1 住宅火災における主な出火原因別件数の推移（2005-2019）

住宅火災の実態データ集（高齢者の生活実態に対応した住宅防火対策のあり方に関する
検討部会報告書巻末資料（消防庁 2021年6月））

主な出火原因別に見た住宅火災による死者数

図2の棒グラフは、平成26年（2014）から平成30年（2018）までの5年間について、主な出火原因別に住宅火災の死者数を見たものです。たばこを原因とする火災による死者数が最も多く、以下、ストーブ、電気関係、こんろ・・・と続いています。

図2の折れ線グラフは、同じように、出火原因別の火災100件当たり死者数（死者発生率）を求めて、棒グラフに重ねたものです。平均死者発生率（8.4）に比べて、ストーブ火災による死者発生率が11.3、たばこ火災による死者発生率が9.2と非常に大きくなっています。これらの原因による火災は、件数が非常に多いだけでなく、火災が発生すると死亡する危険性も非常に高いことがわかります。

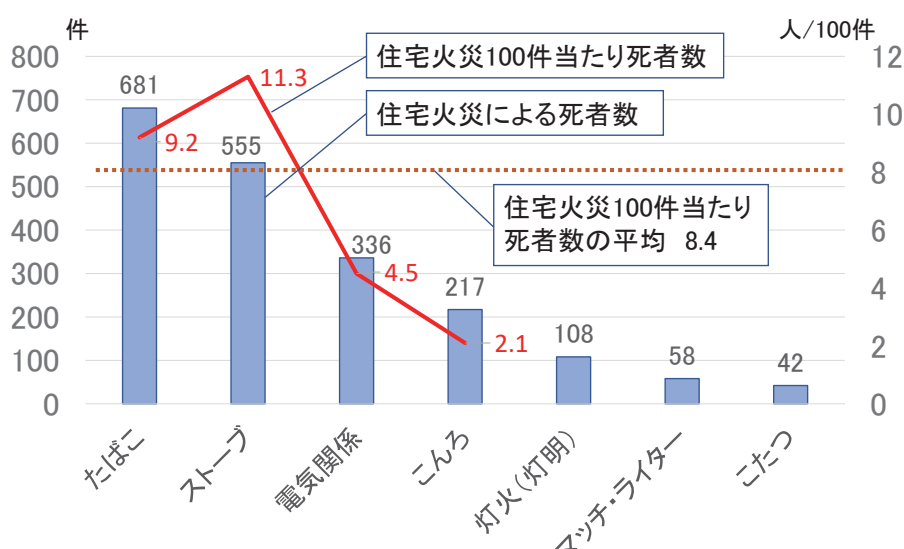


図2 主な出火原因別の住宅火災による死者数と
火災100件当たり死者数（2014-2018）

住宅火災の実態データ集（高齢者の生活実態に対応した住宅防火対策のあり方に関する
検討部会報告書巻末資料（消防庁 2021年6月））より作成（注）放火件数、放火自殺者数を除く

年齢区分別に見た主な出火原因別死者数の割合

表2は、年齢区分別に住宅火災の主な出火原因別死者数の割合を見たものです。

死者の出た火災の出火原因は、80歳以下では、死者数の割合が高い順に「たばこ」「ストーブ」「こんろ」「電灯電話等の配線」などとなっていますが、81歳以上では、微妙に異なっています。「ストーブ」が1位になり、「たばこ」が2位に落ちているのが目を引きますが、80歳以下に比べて「灯火（灯明）」の比率が3倍高くなっており、「配線器具」、「こたつ」の比率も高くなっていることにも留意する必要があります。

表2 年齢区分別に見た主な出火原因別死者数の割合（2014-2018）

出火原因	年齢区分		
	0～64歳	65～80歳	81歳～
たばこ	34.5	34.7	14.1
ストーブ	13.7	22.4	30.9
こんろ	7.2	9	10.2
電灯電話等の配線	7.4	5.6	7.4
配線器具	5.6	5.1	8.3
灯火（灯明）	2.4	2.8	8.2
こたつ	0.7	1.8	2.5
マッチ・ライター	2.1	2.2	2.9

高齢者の生活実態に対応した住宅防火対策のあり方に関する検討部会報告書（消防庁 2021年6月）

以下、出火原因別に詳しく見ていきます。

たばこを出火原因とする火災による死者

図3は、たばこを出火原因とする住宅火災による死者数を、年齢区分別・男女別に見たものです。

まず、男性が女性の3倍以上になっていることが目を引きます。

男性では、65～69歳が最も多くなっており、これを頂点として正規分布のような形のグラフになっています。高齢者層が多いのですが、壮年層もそれなりの死者を出しています。

一方女性は、高齢者が特に多くなっており、65歳以上は年齢区分にかかわらずほぼ同じように死者を出しているのが特徴的です。

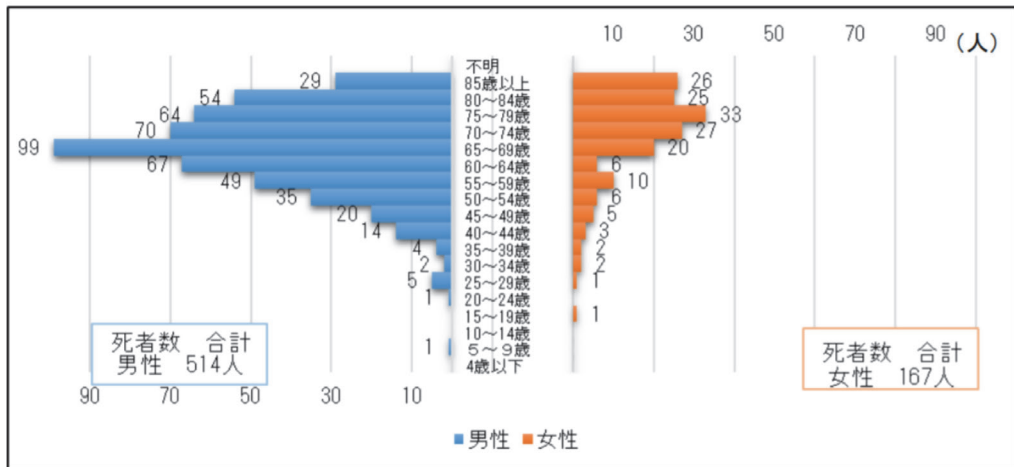


図3 たばこが出火原因の住宅火災における年齢区分別・男女別死者数
(2014-2018) n=681

高齢者の生活実態に対応した住宅防火対策のあり方に関する検討部会報告書(消防庁 2021年6月)

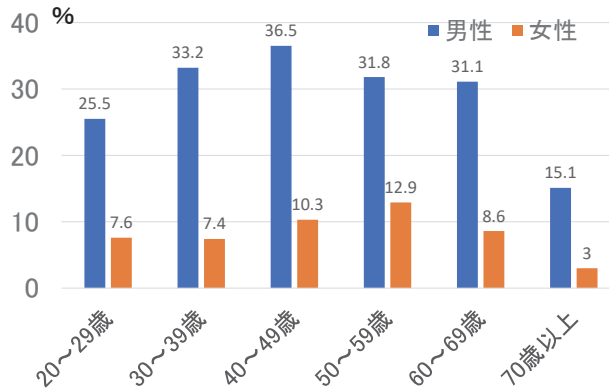


図4 習慣的に喫煙している人の年齢区分別割合(2019年)

厚生労働省国民健康・栄養調査

住宅火災の実態データ集(高齢者の生活実態に対応した住宅防火対策のあり方に関する
検討部会報告書巻末資料(消防庁 2021年6月))より作成

このような傾向は、年齢別の喫煙者数と関係がありそうです。図4を見ると、男性の場合はある程度の相関関係が見て取れますが、女性の場合はあまり関係がないように見えます。女性の高齢者がたばこを原因とする火災で死亡するのは、家族の喫煙による火災に巻き込まれることが多いということでしょう。

夫が喫煙する高齢の女性は、自分が喫煙しなくてもたばこ火災による火災死リスクが高くなりますので、夫の喫煙をやめさせるよう真剣に働きかけるべきだと思います。

たばこの火がどんな物に着火すると、火災死に結びつくのでしょうか？ 2021 報告書にはそのデータはありませんが、消防庁の「住宅防火対策検討委員会」が平成元年（1989）にまとめた報告書では、図5のようになっており、ふとん類が圧倒的に多く、第二位が紙類

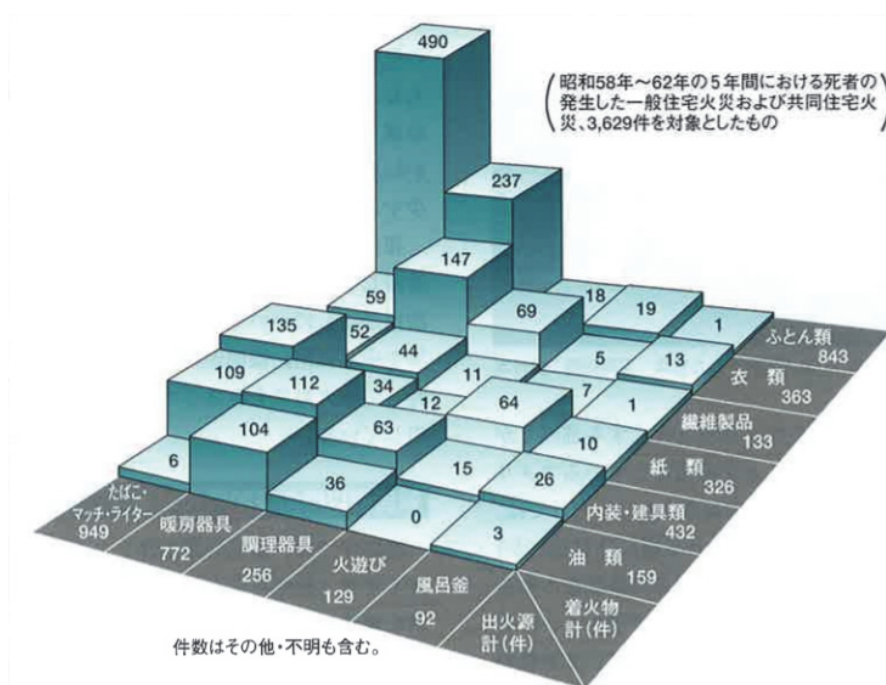


図5 死者の発生した住宅火災における主な着火物と出火源の関係
(消防庁 住宅防火対策検討委員会報告書(平成元年(1989)))

図5のデータはちょっと古いので、代わりに本誌拙稿第4回（2020年7月号）のデータを見てみましょう（図6）。これは、死者の有無に関係なく、住宅におけるたばこ火災全体の着火物を見たものですが、これを見ると、屑類を除けば、布団類に着火する火災が断然多く、袋及び紙製品が第二位になっており、死者の出た火災についても30年前とあまり変わっていないことが類推できそうです。

たばこ火災によって死亡する者の多くは寝たばこが原因です。酔ってたばこを吸いながら寝てしまい、顔のそばの布団が薫焼して発生したCOを吸い込んで、CO中毒で身体が動かなくなりやがて焼死する、という例が多いのです。このため、図2に見るように、火災原因別の死者数ではたばこ火災によるものが最も多くなっており、火災が発生した場合に死に至る危険性も、ストーブ火災に次いで第二位となっています。

対策としては、本誌の読者の場合、防災布団に変えること、と言いたいところでしょうが、それだけでは中途半端だと思います。やはり、禁煙がベストです。禁煙できない場合でも寝たばこ厳禁は徹底する必要があります。

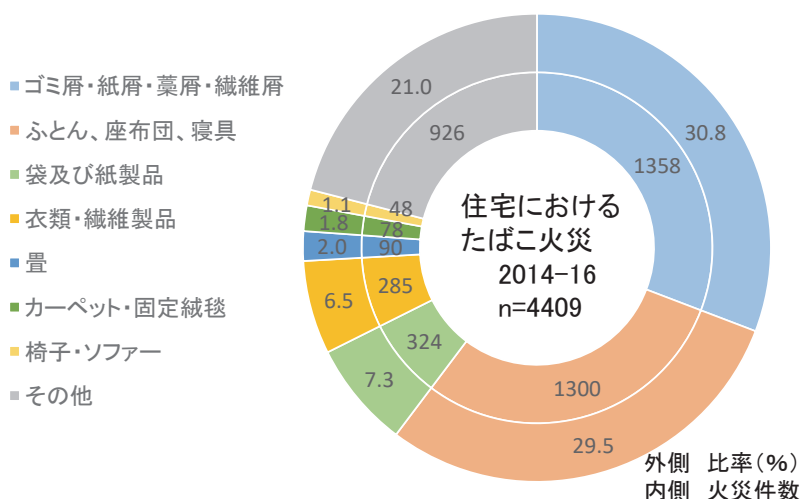


図6 住宅におけるたばこ火災の着火物（2014-16）

消防庁火災報告データより作成 n=4409

第二位は、図5も図6も紙類になっています。高齢者は、書類などを本箱などに片付けるとどこに片付けたか忘れてしまうので、大事な書類ほど机や畳の上に積んでおいたりするようになります。これらが、たばこの火と接触して火災になることも少なくないのです。